いざうましめずよみがへらせよ：宮沢賢治「『東京』ノ-ト」の<自然>

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 1990-03-01
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 杉浦, 静
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1521

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

いざうましめずよみがへらせよ

――宮沢賢治「『東京』ノート」の〈自然〉――

杉浦静

1

「『東京』ノート」の素材となっているのは、岩手県花巻町に居住していた宮沢賢治の昭和三年六月の第八回目の上京体験であるが、この時の〈東京〉体験は、生活史・作品史のなかでは次のような位置をしめるものであった。生活史上からは、昭和三年(1928)六月に宮沢賢治は、七日の午前六時三十五分花巻駅発の汽車に乗って立ち、二十四日前後に帰郷する[注1]までの間、仙台・水戸・伊豆大島・東京を訪れ、仙台では東北産業展覧会を見学し水産加工品の調査を行ない、水戸では茨城県立農業試験場を訪れ「試験場の練習生制度」を調べ、東京に着いてからは、自らの文化的欲求を満たすために演劇(新劇・歌舞伎)や浮世絵展覧会を見、その間に伊豆大島に赴いて友人伊藤七雄が開校しようとした農芸学校の相談に乗る、などほぼ半月にわたって「毎日三四時間しか睡ら」ない忙しい時間を過したのであった。[注2] 作品史の上では、この間、伊豆大島への行き帰りや大島での土壌調査等の間には、後に「三原三部」にまとめられるスケッチをとり、東京では六篇の「『東京』ノート」収録のスケッチの原型を書いた。また、帰郷後の「〔澱(ママ)った光の澱の底〕」にもこの時の東京体験が色濃く影を落としていく。つまり、昭和二(1927)年八月下旬以降ひさかたぶりに旺盛にスケッチがとられた時期にあ

たるのである。[注3]

以上のような多様な活動が展開され、そのスケッチが書かれた時期であるため、「『東京』ノート」の中核をなす、この時期（昭和三年六月）の〈東京〉スケッチも多様な性格を持っている。本稿では、「『東京』ノート」論の一環として、心象スケッチ「高架線」をてがかりに〈東京〉と〈自然〉のかかわりを明らかにしたい。

なお、「『東京』ノート」の成立については、本稿末尾の補説を参照されたい。

2

「『東京』ノート」に収録された心象スケッチ（詩）の一つに「高架線」と題されたものがある。高架線は、昭和四年一二月に刊行された『新版大東京案内』（中央公論社刊）の〈盛り場上野〉の案内の項に、「上野へ行ったなら先づ、公園の石段を上り、西郷さんの銅像の前に立って見ることだ。復興東京の街の姿を一目に見るにはこゝが都下第一の場所だからである。目の及ぶ限り、街、街、街…。高架線を走る山ノ手電車、京浜電車、足下の広小路を奔流する人の群、市電、バス、円タクトラック、自転車—即ち此処は、動く都会の全貌をもっとも端的に一目に見せるところである。」と書かれ、更にその写真が掲載されるごとく、まさに復興東京のシンボルの一つに数えられるものであった。心象スケッチ「高架線」は、そのような高架線を走る電車の窓から見える〈新興東京〉の風景や、それらに触発されて明滅する心象を「構成派風の詩法」（入沢康夫）[注4]を取り込みながらスケッチした作品である。その前半は、「タキスのそら」のもと「アンテナの櫓」や「江川坦庵作とも見ゆる／黒くて古き煙突」、さらに「地球儀または／大きな正金銀行風の／金の Ball」などが新旧雑然と立ちそびえる風景の中に、「羊のごとくいと臆病な眼をして／タキスのそらにひとり立つひと」の姿を繰り返し点描し、その後、

一千九百二十八年では
みんながこんな不況のなかにありながら
大へん元気に見えるのは
これはあるひはごく古くから戒められた
東洋風の倫理から
解き放たれたためではないかと思はれまする
ところがどうも
その結末がひどいのです。

と、禁欲的生活倫理から解放された東京の人々の享楽的生活意欲が将来した生活現実を、否定的に評価する口吻をもらすかたちでまとめられている。後半では、最初に「この大都市のあらゆるものは／炭素の微粒こまかき木綿と毛の繊維／ロームの破片／熱く苦しき炭酸ガスや／ひるのいきれの層をば超えて／かのきらけき氷窒素のあたりへ向けて／その手をのばし／（略）／まさしく風にひるがへる」と、その〈ひどさ〉を、気圏（大気）の汚濁の問題として捉え、その汚濁ゆえに「氷窒素の層のかなた」から「天女が陥ちてくる」という幻想までも描いてゆくのである。このような気圏の汚濁は、「『東京』ノート」の東京では一貫しており、心象スケッチ「光の渣」にも、「幾百乱れる電柱と／またまっ黒な鉄のタンクは／メタンや一酸化炭素水素など／迷ひを集積するものである」「その青じろい光の渣の下底には／（略）／あけがたまた日のうちは／青々としてかなしみを食む／あやしい人魚の群が棲む」などと描かれているのである。このような汚濁に対して宮沢賢治が対置したのは、次のような〈自然〉である。

いまこのつかれし都に充てる
液のさまなす気を騰げて
いざうましめずよみがへらせよ

岬と湾の青き波より
檜葉亘れる稲の波より
はるけき巌と木々のひまより
あらたに澄める瀬気を送り
まどろみ熱き子らの頬より
汗にしみたるシャツのたもとに
またものうくも街路樹を見る
うるみて弱き瞳と頬を
いとさわやかにもよみがへらせよ
緑青ドームさらに張るとも
いやしき鉄の触手ゆるとも
はては天末うす赤むとも
このつかれたる都のまひる
いざうましめずよみがへらせよ

関東大震災後の東京の復興がもたらした新たな都会文明とそれを刹那的に享受する東京の人々の姿を、疲れや心身の或いは生命の衰弱と捉え、そこに生命を回復させるエネルギーとして「澄める瀬気」即ち〈自然〉を対置したのであった。高架線を走る車中で去来した心象には、「ひかりかゞやく青ぞらのした／労農党は解散される」や「みんながこんな不況のなかにありながら」といった社会・経済的な事象についての関心もかいまみえるのではあるが、それは点描されるにとどまり、疲弊する都会文明の回復の可能性は、社会・経済的基盤の分析や変革という回路に探られるのではなく、〈病め

る都会〉対〈健康な自然〉という構図のなかでいわば悲願のごとく念じられたのである。

〈健康な自然〉は、直前に赴いた伊豆大島や自らの郷土である岩手の農村などでの自然との交感という体験に基盤をもつ理念であるはずだ。宮沢賢治は農学校教師時代や農村での肥料設計・羅須地人協会の活動の中で、身をもって体験した農村自体の構造的疲弊に対しても、「雲からも風からも／透明なエネルギーが／そのこどもにそゝぎくだれ」（「一〇八二「あすこの田はねえ」」下書稿(一)という詩句に見られるように、自然のエネルギーによって農民の疲弊を回復させ、生への意欲の回復が可能になるという理念を対置させていたこともあった。このような構図が、花巻とは異なり生活や活動の基盤をもたない〈東京＝中央〉にいわば図式的にあてはめられたのである。それゆえ、〈自然〉への期待は弱々しく悲願や祈りにならざるをえなかったのである。

3

昭和三年六月の東京滞在から花巻に帰った直後にその原形が書かれた「「澱（ママ）った光の澱の底」」という心象スケッチ（『『装景手記』ノート」所収）にも、この時の東京体験は照り返されている。

澱（ママ）った光の澱の底
夜ひるのあの騒音のなかから
わたくしはいますきとほってうすらつめたく
シトリンの天と浅黄の山と
青々続く稲の氈
わが岩手県へ帰って来た
いざうましめずよみがへらせよ

こゝではいつも
電燈がみな黄いろなダリアの花に咲き
雀は泳ぐやうにしてその灯のしたにひるがへるし
麦もざくざく黄いろにみのり
雲がしづかな虹彩をつくって
山脈の上にわたってゐる
これがわたくしのシャツであり
これらがわたくしのたべものである
眠りのたらぬこの二週間
痛せて青ざめ眼ばかりひかって帰って来たが
さああしたからわたくしは
あの古い麦わらの帽子をかぶり
黄いろな木綿の寛衣をつけて
南は二子の沖積地から
飯豊　太田　湯口　宮の目
湯本と好地　八幡　矢沢とまはって行かう
ぬるんでコロイダルな稲田の水に手をあらひ
しかもつめたい秋の分子をふくんだ風に
稲葉といっしょに夕方の汗を吹かせながら

みんなのところをつぎつぎあしたはまはって行かう

「澱った光の澱の底／夜ひるのあの騒音」の都市〈東京〉から「わが岩手県」へ「瘠せて青ざめて眼ばかりひかって」帰った後、岩手の自然の中で農業指導のために「みんなのところをまはって行」こうという決意が述べられている。ここでは、「ここではいつも／電燈がみな黄いろなダリアの花に咲き」以下、「雲がしづかな虹彩をつくって／山脈の上にわたってゐる」まで、あらためて故郷岩手の豊かな風土が発見されている。しかも、その風土は、そこに「電燈」がともり、「麦」が実っている場所であり、自然と人為（文化や農耕）が調和していると感じられている風土でもある。このような風土に生きることを「これがわたくしのシャツであり／これらがわたくしのたべものである」と自分に最も必要なものとしてまた身についたものとして決意をこめて肯定している。さらに、後半の「ぬるんでコロイダルな稲田の水」以下の自然も、まさに農耕の手が入った自然であり、そのようないわば人為的な自然に宮沢賢治の心をなぐませるものがあったといってよいだろう。

このような、風土の肯定は、逆にそれ以前に滞在していた〈東京〉がいかにそれからかけ離れたものと感じられていたかをうかがわせるものである。

「高架線」「〔澱った光の澱の底〕」に共通するのは、〈病める都会〉対〈健康な自然〉という構図であり、しかも〈健康な自然〉は農耕との関わりをその中に含んだものである。宮沢賢治の心象のスケッチには、岩手の自然が生き生きと捉えられているものが多く[注5]、賢治の自然との関わりの中心に自然との一体化の欲求を見ることも可能であるが、いま見たようなスケッチでは、澱みのなかに衰弱・疲労した都市や人を癒すものとして、自然が対置されて描かれており、賢治の〈自然〉は〈東京＝中央[注6]〉が意識された時、異なった位相を見せるようである。以下、宮沢賢治のこれら以外の心象スケッチその他における〈東京＝中央〉と〈自然〉との関連を検討する。

4

前述の通り、この昭和三年六月の上京は、宮沢賢治にとって八回目のものであるが、後に「東京」ノートに収録・再録された短歌・短唱・心象スケッチ（詩）以外には、〈東京〉に言及したものは、滞京中の動静を報じた書簡[注7]を除くと意外に少ない。短歌・短唱・書簡以外の心象スケッチで最初に言及されたのは、『春と修羅』（第一集）の「宗教風の恋」（一九二三、九、一六）で、

風はどうどう空で鳴ってるし
東京の避難者たちは半分脳膜炎になって
いまでもまいにち遁げて来るのに
どうしておまへはそんな医される筈のないかなしみを
わざとあかるいそらからとるか
いまはもうさうしてゐるときでない

と、記され、一九二三年九月一日の関東大震災からの避難者たちを見、さらに東京の壊滅を報じる新聞記事等に触れるなかで、栗原敦が述べるごとく、「賢治自身の思想や生き方に反省を求め、社会、現実認識に変容を迫るような事態が彼を取り囲む世界で徐々に、あるいは急激に進行し、それゆえに彼は「宗教風の恋」に見られるような禁止を、また新たなる決意を生み出さねばならなかった」（『風景とオルゴール』の章二連作／―『心象スケッチ　春と修羅』第八章の構成[注8]）、のであり、その契機として〈東京〉の壊滅が語られていたのである。

さらに、「宗教風の恋」の三作後に置かれた「昴」では、夜になって「山」から帰る電車の中から見える風景の価置を、

次のように発見した。

そのまっ青な夜のそば畑のうつくしさ
電燈に照らされたそばの畑のうつくしさ
市民諸君よ
おおきゃうだい、これはおまへの感情だな
市民諸君よなんてふざけたものの云ひやうをするな
東京はいま生きるか死ぬかの堺なのだ
見たまへこの電車だって
軌道から青い火花をあげ
もう蝎かドラゴ(ママ)かもわからず
一心に走ってゐるのだ

震災後の混乱のさなかにある東京の「市民諸君」に今、岩手の自然・風土にねざした風景の美を提示することの増上慢が反省的に書かれているものの、明らかにここには東京の「市民諸君」には未見の〈美〉を誇りをもって示そうとする態度が表われている。これは、後に童話集『注文の多い料理店』の〈広告ちらし〉の「これは田園の新鮮な産物である。われらは田園の風と光との中からつやゝかな果実や、青い蔬菜と一緒にこれらの心象スケッチを世間に提供するものである。」という一節にまっすぐにつながるものである。大正一三年（1924）一二月刊の『注文の多い料理店』に収められることになる一連の〈イーハトヴ童話〉が、大正一〇年八月末の帰郷後、堰を切ったように書かれ、そのうちでもより岩手の風土に密着した素材を扱った「かしはばやしの夜」「鹿踊りのはじまり」「狼森と笊森、盗森」が九月から一一月までの三ヵ月の間に執筆されたという事実は、半年以上にわたる東京滞在の後、〈東京〉をくぐりぬけた眼によって、新たに岩手花巻の

〈風土〉を発見し直したということを意味しよう。それはまさに〈自然〉と一体化しているかのごとき人々の生活の営みの中に新たな美を見出していったということである。その時、明らかに〈東京〉はその対極に置かれていたのであった。

ちなみに、その後の上京で確認されるのは大正一五年一二月になるのだが、その間にも、上京する希望を持ったこともあったようである。斎藤宗次郎自叙伝『二荆自伝』[注9]には、大正一三年の項に、「年末に近き二十四日の午後農学校を訪うた、畠山校長も高橋会計も見えなかったが職員室に幸宮沢先生は居った、（中略）、先生は二十六日上京して中央語を聞いたり何かの講習にでも臨んだりして来たいと思う〃とのことであった。」（傍線原文）との記述がある。結局この時の上京が実現したかどうかは不明であるが、目的として「中央語を聞い」て来ること、「何かの講習に」参加することが挙げられている。これは、後の大正十五年十二月の上京の際の、セロ・オルガン・エスペラント・タイプライター等の講習となって実現したわけであるが、この時は、いまだ農学校の教諭を退職する意志を持つ以前、まさに生徒達の意気発揚に「田園劇」等を企画・実現し、疲弊する農民子弟たちの教育に熱情を注いでいた時期であった。同時期には心象スケッチに見られるように、岩手をイーハトーヴと見ようとする志向が強く表われ、あえて中央アジアの農民の姿を現実の岩手の農民の上に重ね合わせて見ようとするようなスケッチが書かれていた。[注10]そのようなかでの上京の希望は、おそらく心象スケッチに関わる何かを吸収しようとするものであっただろう。ともあれ岩手の風土の上に世界的な穀倉地帯を重ね合わせ、その〈自然〉に新たな美を発見しようとしながらも、東京に文化的優位性を認めていることは疑えない。

ところで、このような〈新たな自然〉の性格をもう少し具体的に見ておきたい。どのような眼でもって自然を見ているのであるかということである。大正十三年五月十九日から二十三日にかけて実施された花巻農学校始めての修学旅行終了後に提出した「復命書」に次のように北海道の自然を見る態度について書いている。

車窓見る処苗代稲苗漸く伸び直播又今正に行はる。本道独特の散点状村落並にその家屋の構造多少移住者の郷土を示すものあるを見る。而もその近時の築成に斯るもののクレオソートを塗れる粗板二色の亜鉛板を用ひて風致津々たるあり。早く我等が郷土新進の農村建築家を迎へ、従来の不経済にして陰鬱、採光通風一も佳なるなき住居をその破朽と共に葬らしめよ。

北海道特有の集落の景観を叙し、その新規築成の住居の美観を賞した後、郷土花巻の農家の建築と比較して、その非合理的構造の改良の必要性を痛感しているのではあるが、その語調は「葬らしめよ」と書くように極めて強い。当時の農業先進地であった北海道と、郷土との落差を如何に埋めるべきかという課題の痛切さを身をもってあらためて受けとめているのであろう。この「修学旅行復命書」には、次のように後進地岩手における先進地への進展を期待する提言も書かれていた。植民館を見学した時の記事の中である。

中に開墾順序の模型あり。陰惨荒涼たる林野先づ開拓使長官によりて毎五町歩宛区画を設定せられ、当時内地敗残の移住民、各一戸此処に地を与へらる。然も初め呆然として為すなく、技術者来り教ふるに及んで漸く起ちて斧刀を振ひ耒耜を把る。近隣互に相励まして耕稼を行ふ。圃地次第に成り陽光漸く徧く交通開け学校起り遂に楽しき田園を形成するまで誰か涙なくして之を観るを得んや。恐らくは本模型の生徒将来に及ぼす影響極めて大なるべし。望むらくは本県亦物産館の中に理想的農民住居の模型数箇を備へ将来の農民に楽しく明るき田園を形成せしむるの目標を与へられんことを。

ここにはもうすこし見るべき問題が書かれている。それは北海道の自然が開墾されることによって「楽しき田園」が形成されたという認識である。すなわち「陰惨荒涼たる林野」が、技術者の指導と植民者の協働という二つの要素によって「楽しき田園」へと変化せしめられたということである。次の、視点を意識的に変化させる事によって、現実認識に変化を与える事が可能であるから、そのような訓練が農学校生徒に必要であるとする発想も、また社会構造が変化しない中で

のせめてもの〈明るき田園〉形成への試みであろう。

車窓石狩川を見、次で落葉松と独逸唐檜との林地に入る。生徒等屢々風景を賞す。蓋し旅中は心緒新鮮にして実際と離るゝが故に審美容易に行なはるゝなり。若し生徒等この旅を終へて郷に帰るの日新に欧米の観光客の心地を以てその山川に臨まんか孰れかかの懐かしき広重北斎古版画の一片に非らんや。実に修練斯の如くならざるよりは田園の風と光とはその余りに鈍重なる労働の辛苦によりて影を失ひ、農業は傍観して神聖に自ら行ひて苦痛なる一の skimmed milk たるに過ぎず。且つや北海道の風景、その配合の純　調和の単　容易に之を知り得べきに対し、郷土古き陸奥の景象の如何に複雑に理解に難きや、暗くして深き赤松の並木と林、樹神を祀れる多くの古杉、楊柳と赤楊との群落、大いなる藁屋根　檜の垣根、その配合余りに暗くして錯綜せり。而して之を救ふもの僅に各戸白樺の数幹、（略）寔に田園を平和にするもの樹に超ゆるなし。（「修学旅行復命書」）

執筆年月は不明であるが、その内容から、農学校を退職し農耕生活に入った後に書かれたことは確実である心象スケッチに「心象スケッチ　林中乱思」というものがある。そこには次のように〈東京〉に対する意識が書かれていた。

何とこの焔の美しさ
柏の枝と杉と
まぜて燃すので
こんなに赤のあらゆる phase を示し
もっともやはらかな曲線を
次々須臾に描くのだ
それにうしろのかまどの壁で

煤かなにかゞ
星よりひかって明滅する
むしろこっちを
東京中の
知人にみんな見せてやって
大いに羨ませたいと思ふ

小沢俊郎は、このスケッチを論じて（「熱にふるへ」『小沢俊郎　宮民賢治論集』第二巻所収）[注11]、「『林中乱思』一篇は文字通り乱思のしどろもどろの中に、農耕生活のいたましさとけなげさ、孤独のきびしさと友を求める渇き、純粋さとひよわさ、観念性など、賢治の裸の心が風邪気味の健康状態に触発されてむき出しになった詩である。」とまとめたことがあった。その論述の中で、前出の箇所から、宮沢賢治の「東京崇拝とでもいえる感情」の表出や「都会への傾斜、中央へのコンプレックス」を指摘し、「身近な人に無理解な言をかけられたとたん、遠い都会の（さして往来繁からぬはずの）知人に自分の理解者を夢みている」観念性を抽出していた。「羨ましい」と思えるのはその価値の理解が前提にあるのだから、小沢俊郎の言うごとく、東京の「知人」は、自らの発見した新しい美をともに感ずることができる存在として想定されているのである。しかし、そうであるからと言って、そこに「東京崇拝」や「都会への傾斜、中央コンプレックス」は存在するのであろうか。ここでは、自分に匹敵する美感をもつ人間の存在が求められているのではなく、むしろ、そのような存在を「羨ませたい」というのであり、この岩手における農耕生活の中で、東京に存在しない（であろうと考えた）新しい美を発見しているという自負が語られているのである。それゆえ、「羨ませたい」と考えたことは、後の行で「それも結局 distinction の慾望の／その一態にほかならない」と否定的に捉え返されることになるのである。ここにおいても、前出の「昂」と同一の、岩手という風土・自然の中での生活につながった新しい美の発見を〈東京〉に対して提示す

るという構図を確認することができるであろう。

次に、宮沢賢治が農耕生活に入る直前から理念化されていった〈農民芸術〉において対東京の問題がどのように捉えられようとしていたのかを見ておかなければならない。

「農民芸術概論綱要」の「農民芸術の興隆」の項には次のように宗教・芸術の現状認識をふまえた、改革の方向が語られる。

いま宗教家芸術家とは真善若くは美を独占し販るものである
われらに購ふべき力もなく　又さるものを必要とせぬ
いまやわれらは新たに正しき道を行き　われらの美をば創らねばならぬ
芸術をもてあの灰色の労働を燃せ
ここにはわれらの不断の潔く楽しい創造がある
都人よ　来ってわれらに交れ　世界よ　他意なきわれらを容れよ

また「農民芸術の本質」の項には、

もとより農民芸術も美を本質とするであらう
われらは新たな美を創る　美学は絶えず移動する
「美」の語さへ滅するまでに　それは果なく拡がるであらう
岐路と邪路とをわれらは警めねばならぬ
農民芸術とは宇宙感情の　地　人　個性と通ずる具体的なる表現である
そは直感と情緒との内経験を素材としたる無意識或は有意の創造である
そは常に実生活を肯定しこれを一層深化高くせんとする
そは人生と自然とを不断の芸術写真とし尽くることなき詩歌とし

巨大な演劇舞踊として観照享受することを教へる
そは人々の精神を交通せしめ　その感情を社会化し遂に一切を究竟地にまで導かんとする
かくてわれらの芸術は新興文化の基礎である

と、農民芸術の理念が語られている。いまここで注目しておきたいのは、農民芸術の本質が、「新たな美」の創造に求められていることである。さきの、「農民芸術の興隆」において、芸術を職業芸術家から奪還しようとする意図や「都人よ　来ってわれらに交れ」というように都会＝中央の文化的優位性を逆転させようという意図が語られていたのであるが、「われら」の求める美の担い手は、「農民芸術概論」の「序論」に語られるごとく「農民」である。その「農民」によって創り出されねばならない美とは、従来の美の範疇を拡大したものであった。そこでは、「宇宙感情の　地　人　個性と通ずる具体的な表現である」や「人生と自然とを不断の芸術写真とし尽くることなき詩歌とし／巨大な演劇舞踊として観照享受することを教へる」とあるように、自然と人生との相互交渉の中に見出された美であり、労働そのものの中で体感されるような流動的な美とでも言ってよいだろう。

また宮沢賢治自身の書いたものではなく、記者のまとめたものだが、農学校退職時とその後の羅須地人協会の設立時に、「岩手日報」に掲載された次のような記事からもこの時期の、宮沢賢治の活動の理念がうかがえる。

・新しい農村の／建設に努力する／花巻農学校を／辞した宮澤先生（見出し）

花巻川口町宮澤政治郎氏長男賢治（二八）氏は今回県立花巻農学校教諭を辞職し花巻川口町下根子に同士二十余名と新しき農村の建設に努力することになった　きのふ宮澤氏を訪ねると現代の農村はたしかに経済的にも種々行きつまつてゐるやうに考へられます、そこで少し東京と仙台の大学あたりで自分の不足であった『農村経済』について少し研究したいと思ってゐます。そして半年ぐらゐはこの花巻で耕作にも従事し生活即ち芸術の生がいを送りたいものです、そこで幻燈会の如きはまい週のやうに開さいするし、レコードコンサートも月一回位もよほしたいとおもっ

てゐます　幸同志の方が二十名ばかりありますので自分がひたいにあせした努力でつくりあげた農作ぶつの物々交換をおこないしづかな生活をつづけて行く考えです（以下略　大正十五年四月一日付　「岩手日報」朝刊）

この翌年には次のように報じられた。

・　農村文化の創造に努む／花巻の青年有志が／地人協会を組織し／自然生活に立返る（見出し）

花巻川口町の町会議員であり且つ同町の素封家の宮澤政次郎氏長男賢治氏は今度花巻在住の青年三十余名と共に羅須地人協会を組織しあらたなる農村文化の創造に努力することになった　地人会の趣旨は現代の悪弊と見るべき都会文化に対抗し農民の一大復興運動を起こすのは主眼で、同志をして田園生活の愉快を一層味はしめ原始人の自然生活にたち返らうといふのである　これがため毎年収穫時には彼等同志が場所と日時を定め耕作に依って得た収穫物を互ひに持ち寄り有無相通ずる所謂物々交換の制度を取り更に農民劇農民音楽を創設して協会員は家族団らんの生活を続けて行くといふのである、（以下略　昭和二年二月一日付「岩手日報」夕刊）

宮沢賢治が実際に本格的に羅須地人協会の活動を開始しようとして配布（大正一五年十一月二九日以前）した謄写版刷り案内状（〔集会案内〕）には、

一、今年は作も悪く、お互ひ思ふやうに仕事も進みませんでしたが、いづれ、明暗は交替し、新らしいいゝ歳も来ませうから、農業全体に巨きな希望を載せて、次の支度にかかりませう。

二、（略）

三、その節次のことをやります。予めご準備ください。

冬間製作品分担の協議

製作品、種苗等交換売買の予約

新入会員に就ての協議

持寄販売……本、絵葉書、楽器、レコード、農具、不要のもの何でも出してください。安かったら引っ込ませるだけでせう、……

四、今年は設備が何もなくて、学校らしいことはできません。けれども希望の方もありますので、まず次のことをやってみます。

十一月廿九日午前九時から

われわれはどんな方法でわれわれに必要な科学を／われわれのものにできるか　一時間

われわれに必須な化学の骨組み二時間　二時間

働いてゐる人ならば、誰でも教へてよこしてください。

ここでの「冬間製作品」とは堀尾青史編の校本全集年譜注記によれば、農民服・帽子・皮帽子・木工・木琴・ルパシカの紐などの製作が考えられたが、結局実現の運びにはいたらなかったようである。また、翌昭和二年一月の「〔講義案内〕」では、より具体的に「農業ニ必須ナ化学ノ基礎」「土壌学綱要」「植物生理綱要」「肥料学綱要」「エスペラント地人芸術概論」などの講義案内がされている。これらの案内を見る限り、「岩手日報」の記者のまとめたような、〈物々交換〉の制度を取り込んだ共生的な組織の構想は、むしろ副次的なものであり、「人生即ち芸術の生がい」を周辺に拡大することで、「新たなる農村文化」の創造という文化活動に主眼がおかれていたことは確実であったろう。より具体的には、農業の科学化と農民芸術の創造を二つの軸とした運動が想定されていたのであった。その契機として、「現代の悪弊と見るべき都会文化」があり、農村の経済的疲弊や困窮があった。まさに、前者に対抗するものとしての農民芸術が構想され、後者を解決するものとしての農業の科学化が推進されねばならないと考えられたわけであった。このような運動によって実現される〈自然〉もまた、科学化された農耕の手が入った人為的自然をその中核としていたと考えてよいだろう。

*

以上見てきたような〈東京〉と〈自然〉の関わりの流れの後に、「高架線」に見られるような〈東京〉把握が来る。「『東京』ノート」の〈東京〉批判の下地の一部はすでに準備されていたのであった。

注1　花巻に帰った日は未詳。昭和三年〔六月十六日〕付宮沢クニ宛書簡には「二十三日から出て二十六日の午后までに家にかへります」とあり、〔七月初め〕の伊藤七雄宛て書簡下書には「こちらへは二十四日に帰りましたが」とある。

注2　『校本宮沢賢治全集』第十四巻・年譜（堀尾青史編・昭和52・10　筑摩書房）や奥田弘「宮沢賢治詩『三原三部』その周辺」（「銅鑼」二十三号・昭46・7　校倉書房）

注3　昭和二年八月以降三年六月までの間の日付をもつ心象スケッチはごくわずかである。その理由の一つに、この二年冬から三年春にかけて、第二集の編集にかかっていたことが数えられる。

注4　入沢康夫『新修宮沢賢治全集』第七巻「後記（解説）」（昭55・4　筑摩書房）

注5　とりわけ昭和三年初夏に序が書かれたものの出版されなかった『春と修羅　第二集』の原構想にその傾向が強い。

注6　特にその文化的優位性に対する憧れが強くあったことはこれまでも指摘されている。

注7　東京の文化を積極的に吸収しようとしてさまざまな所を歩き回っている宮沢賢治の姿がうかがわれる書簡が多い。

注8　栗原敦「『風景とオルゴール』の章二連作／――『心象スケッチ　春と修羅第一集』第八章の構成」（「実践女子大学文学部紀要」第三十集・昭63・3）

注9　栗原敦「宮沢賢治周辺資料（その4）――『二荆自叙伝』（斉藤宗次郎自叙伝）による――」（「実践女子大学文学部紀要」第二十九集・昭62・3）

注10　拙稿「『曠原淑女』（宮沢賢治）――『イーハトブ』への志向・粗描」（「言語と文芸」一〇〇号・昭61・12）

注11　昭62・4有精堂

補説　「『東京』ノート」の成立

「東京」ノートは、昭和三年六月の上京の際のスケッチを主としながら、それ以前の東京を題材にした短歌・心象スケ

ッチ等を類聚して成立したものである。その時期は、『校本宮沢賢治全集』の「校異」では、

本ノートの使用時期は、一頁の日付等からみて、昭和三年六月以降である。四一頁から五六頁にかけて赤インクで書かれた部分は、早い日付であるが、昭和三年以降の書き入れであろう。さらに「三原三部」ノートの項で指摘したように、「装景手記」ノート表紙に書かれた日付等から勘案して、昭和五年頃と推定する。

と推定されている。ところで、「校異」の記述では、ノートの筆記用具は鉛筆・赤インクの二種に限られているが、ノート本文下段に示された「《筆記具》」の項では、鉛筆は、さらに濃い鉛筆・淡い鉛筆の二種に分けられている。すなわち鉛筆書きも二段階に分かれるのである。ただ、濃い鉛筆と淡い鉛筆の先後関係は一様でなく作品によって異なるが、異なる濃度の鉛筆は、一度作品が形をとった後の推敲に用いられている。また、赤インクの使用も、先の「校異」の注記のごとく作品全体が赤インクで書かれたものと、鉛筆で一度書いた後に赤インクで推敲したものの二種がある。濃度の異なる鉛筆による推敲も赤インクによる推敲も、ほとんどすべて（例外は「丸善階上喫煙室小景」の一ヵ所のみ）先に成立していた作品の一部を削除するか、あるいは文語詩に変えるためのものである。以上のような筆記用具の使用状況及び作品の種類等から、（付表）「東京」ノートの成立段階を推定すると次のごとくなろう。

第一段階

「『東京』手帳」と仮に称すべき手帳（その一部残存断片が、「手帳断片B」として『校本全集』第十二巻（上）に収録されている。）から、「東京」ノートに筆写された。作品は、「浮世絵展覧会印象」「高架線」「神田の夜」「自動車群夜となる」「丸善階上喫煙室小景」である。その際、詩（心象スケッチ）ごとに空白頁が置かれた。

第二段階

赤インクによる東京関係の〔短歌〕〔短唱〕の書き入れ。これらの〔短歌〕〔短唱〕は、昭和三年六月以前の上京の際に作られていたものを、『歌稿B』[注1]などから転写したものである。

頁	題名	日付	筆記具	備考
1～6	浮世絵展覧会印象	1928.6.15	鉛筆・赤インク	赤インクは削除と「◎」記入のみ
7・8	浮世絵展覧会印象（勝川春章）	1928.6.15	鉛筆・赤インク	赤インクは題名の変更、「◎」、文語詩化
9・10	浮世絵展覧会印象	1928.6.15	鉛筆	
11～16	空白			
17～22	高架線	1928.6.10	淡い鉛筆・濃い鉛筆	濃い鉛筆は、削除、文語化
23～26	高架線	1928.6.10	鉛筆	21頁以降文語
27・28	空白			
29～32	神田の夜	1928.6.19	鉛筆	
33～37	空白			
38・39	自動車群夜となる		鉛筆	
41	空白			
42～43	〔短歌〕	1916	赤インク	
44～48	〔短唱〕	1921	赤インク	文語詩「〔くもにつらなるでこぼこがら〕」・「砲兵観測隊」・「看病」・「〔かくまでに〕」下書稿
49	〔短唱〕	1921	赤インク	「〔聖なる窓〕」下書稿・「公衆食堂（須田町）」
50	〔短唱〕	1921	赤インク	前頁末尾より「われはダルケを名乗れるものは」
51～53	〔短唱〕	1921	赤インク	「〔こはドロミット洞窟の〕」下書稿
54・55	◎孔雀		赤インク	
56	〔題名メモ〕◎図書館（ダールケ博士）◎床屋の弟子とイデア界		赤インク	「初期短編綴」中の作品名。「1921.6.1921.10」の日付。
57	◎恋敵ジロフォンを撃つ		鉛筆	「〔われ聴衆に会釈して〕」
58	空白			
59～62	丸善階上喫煙室小景	1928.6.18	鉛筆・淡い鉛筆	淡い鉛筆による手入れは一カ所のみ。
63・64	空白			
65～67	光の渣		鉛筆	
68～72	メモ		鉛筆・赤インク	赤インクは一カ所の圏点。文語詩メモ・ジャンル等メモ・レコードリスト

第三段階

六八頁以降の〈文語詩素材メモ〉（盛岡中学一年から高等農林二年までの各学年毎の事件を列記したもの）及び文学メモ・レコードリスト等を記入。

第四段階

「光の渣」を記入。この詩の最終部が、すでに次頁が書かれていたためにやむなく六七頁の「左端六行分と野外との上方に記入され」（『校本全集』第一二巻（上）脚注）ていることからして、〈文語詩素材メモ〉よりも後に書かれたと判断する。

第五段階

異なった濃度の鉛筆による推敲。この段階では、例えば「高架線」の「酸化礬土と酸水素焔でこしらえた／紅いルビーのひとかけを／ごく大切に手にはめて／タキスのそらのそのしたを／羊のやうなやさしい眼して立ってゐるひと」が、「酸化礬土と酸水素焔にてつくりたる／紅きルビーのひとかけを／ごく大切に手にはめて／タキスのそらのそのしたを／羊のごときやさしき眼してひとり立つひと」と推敲されたように、用語を文語化する方向で推敲はなされた。ただし、それは「高架線」のみであり、また文語化も徹底していない。

第六段階

赤インクによる推敲。「浮世絵展覧会印象」のみになされた推敲である。第六段階はさらに二段階に分けられる。先ず最初に題名を「浮世絵」と改め、内容を春信・歌麿・春章などの浮世絵師ごとに章分けしようとした。しかし、この試みも徹底されずに途中までで放棄されている。さらにその後、勝川春章の浮世絵を題材にした部分を独立させ、文語定型詩に改作しようとした。

これらの六段階のうち、第二残階と第三段階は先後を逆転させることも可能である。どちらが先という決め手はないの

だが、〈文語詩〉の創作は、すでに小沢俊郎が指摘したごとく（「疾中」と〈文語詩〉[注2]）昭和四年九月から昭和五年秋頃までに「自分史、自伝の企画に立って」始められたわけであり、第三段階の〈文語詩素材メモ〉はそれに関わるものであるから、とりあえず〈東京〉関係の〔短唱〕・〔短章〕の類聚の後に置いておく。なお、この〈東京〉関係の〔短歌〕・〔短唱〕の類聚が、後の文語の詩による「自分史、自伝の企画」の一つの呼び水になった可能性があることを指摘しておこう。

さて、以上の段階を経て現在の「『東京』ノート」は成立していったが、その時期については明確でない。先に引用した『校本全集』の校異によれば昭和五年頃の成立ということになるのだが、いま整理したごとくノートの成立が数次の段階を経ていることからして昭和三年六月下旬に東京方面の旅行から帰ってほど経ないうちに、〈手帳〉から「ノート」への転写がなされ、同年八月病に倒れて以来九月末から十二月中旬までの小康状態の間に第二段階にいたり、また病勢がつのり筆が執れなくなった時期を経て、翌四年九月頃から文語化及び「自分史、自伝」に関わる記事のメモの記入、さらに文語詩への改作の試みへと向って行き、昭和五年頃に現在の形に至った、と時間の幅をもって成立時期を考えておきたい。

「『東京』ノート」は、以上のような成立の経緯からして、第六段階に至って大きく性格をかえ、ノートの解体の方向へと動く兆候を見せるのであるが、それ以前は、まず昭和三年六月の〈東京〉体験のスケッチを初発のモチーフとしながら、〈東京〉をめぐる〈自分史〉の試みへとモチーフが変化し、昭和三年六月以前の東京滞在中の作品が『歌稿B』などから取込まれてとりあえずの成立を見たのである。

注1　『歌稿B』では、「『東京』ノート」に抜き出された短歌は、赤インクの枠で囲まれていたり、「東京中別掲」と注記されていたりする。

注2　「「疾中」と〈文語詩〉」『小沢俊郎宮沢賢治論集』第三巻、昭62・2有精堂

（一九九〇・一・一六稿）